

めぐる 思い

東日本大震災11年

仮埋葬

石巻市南境の火葬場、市石巻斎場の場長で冠婚葬祭業「清月記」(仙台市)の結城国夫さん(65)は、何事もなく一日の仕事が終わると「良かったな」と思う。「当たり前前に火葬してご遺骨をお渡しできる。これが一番いい」

東日本大震災は、そんな「当たり前」を奪った。同社は石巻市で「仮埋葬」としての土葬と、その後の掘り起こしを担った。

過酷な掘り起こし 尊厳守る使命 今に

最も多くの方が亡くなった石巻市から依頼を受けた。「うちが引き受けなければ誰もやらないだろう。使命感があった」と菅原裕典社長(61)は語る。

2011年4月4日から約1000体の仮埋葬を予定していたが、276体で終わった。県外の火葬場で受け入れが進み、一日も早い火葬を望む遺族の声が高まったためだった。

4月半ば、同社専従チームの中心だった西村恒吉さん(48)は、遺族による掘り起こしに立ち会っていた。「今、出してやっからな」。遺族が何度も声を掛けながら必死に重機を操り、掘った穴に飛び込む。

ひつぎは地中でつぶれ、遺体は傷んでいた。遺族には酷だった。「これは、ご遺体、離別の場を大切に葬儀社の職務範囲だ」。西村さんは覚悟を固めた。

感情押し殺す
5月7日、市から受託した仮埋葬地3カ所の遺体の掘り起こしが始まった。重機やスコップで周囲の土を

メモ 宮城県のと東日本大震災では石巻市、気仙沼市、東松島市、亘理町、山元町、女川町の6市町で遺体計2108体の仮埋葬と改葬が行われ、うち石巻市は993体と最多だった。また宮城の計2559体が県外9都道県で火葬された。

取り除く。ひつぎを引き上げ、遺体を新しいひつぎに納める。腐敗が進んでおり、納体袋に穴を開け、たまった体液を出した。体験したことのない臭気。大きなハエが飛び交った。

結城さんは淡々と体を動かした。「そうしないと気持ちが悪そうだったからかもしれない」

ひつぎがあまりに軽く、子どもだと分かるが、無口になった。名前から「祖父と孫か」など想像してしまう。「自分が壊れていきそう、感情と想像力を持たないよう努めた」。一人、仙台へ戻るトラックで大声で叫び、もやもやした思いを吐き出した。

メンバーは折に触れて焼香し、遺体を車で搬出する際は手を合わせた。当時は新入社員だった藤島翔太さん(33)は「ただ

の作業にせず、場面場面で見送りの気持ちを込めた。それが葬儀社が手掛けた意義だと思う」と振り返る。
予期せず死を迎え、十分な弔いもかなわなかった犠牲者。せめて尊厳を守り、大切に遺体を扱いたい。葬儀のプロとしての職業意識と使命感が、過酷な業務の支えでもあった。
専従チームの9人が中心となった掘り起こしは3カ月余りにわたり、自衛隊が仮埋葬した分を含む666体を茶毘に付した。

工夫して対面

仮埋葬という異常事態。現在、事業推進室統括部長を務める西村さんは「ご遺族の気持ちの面でも、われわれの作業の面でも、良かった点はあまりない」と言う。火葬の前、最後の対面を望む遺族もいた。遺体の状態は厳しかった。「最後に見た顔が記憶に残る。『会わない方がいいのでは』と言ってしまうのが、良かったのか」。今も答えのない問いを抱く。

清月記は2020年春以降、新型コロナウイルスで亡くなった人の火葬を多く扱ってきた。病院で遺体を引き取る際、顔部分窓状になるよう、納体袋のファスナーを開けてひつぎに納める。火葬場で遺族が対面できるための工夫だ。

遺体を修復・保存するエンバールミングの部門を設ける準備も進めている。

「震災当時、ご遺体との十分なお別れをかなえられなかった申し訳なきがある」。最期を見送る。亡き人を弔う。震災の経験を経て、かけがえのない「当たり前」に今日も心を尽くす。

(報道部・丸山磨美)



①仮埋葬した遺体を掘り起こす清月記の社員=2011年5月18日、石巻市羽黒町の北鱒山墓地(清月記提供)
②石巻仏教会などが主催する身元不明の犠牲者の慰霊法要をサポートする結城さん(左端)と清月記のスタッフ=7日、石巻市南境の石巻第2霊園